

# 育児と母親の情報機器画面閲覧による干渉・妨害

Technology Use While Parenting and Parent Screen Distraction

久保隅綾 KUBOSUMI, Aya 橋元良明 HASHIMOTO, Yoshiaki

## 目次

### 0. 調査の概要

#### 0.1 調査の目的

### 1. 母親によるスマホ育児の実態

#### 1.1 全体／子どもの性別／学齢別分析結果

#### 1.2 母親の職業別／世帯年収別／学歴別分析結果

### 2. 情報機器画面閲覧による干渉・妨害 (Parent Screen Distraction: PSD)

#### 2.1 情報機器別 PSD 実態

#### 2.2 日常生活場面での母親の PSD 状況認識

#### 2.3 育児と情報機器およびソーシャルメディア利用への態度・考え

### 3. 考察および今後の課題

## <補足資料>

調査方法、回答者の属性、質問票および単純集計結果については、本紀要に同時に掲載されている橋元・久保隅・大野「育児とスマートフォン」を参照願いたい。

---

久保隅綾 GOB Incubation Partners 株式会社  
橋元良明 東京大学大学院情報学環

本報告のベースとなる調査は、株式会社 KDDI 総合研究所と東京大学大学院情報学環橋元研究室の共同研究の一環として実施されたものであり、本報告は当該共同研究の成果の一部である。また、本報告は久保隅綾が執筆した。

## 0. 調査の概要

### 0.1 調査の目的および研究概要

近年、スマートフォンやタブレット端末といった情報機器が仕事や買い物などの日常生活を効率化するだけでなく、育児の面においても親の強力な支援ツールとなっている。とりわけ、子どもにスマートフォンを渡し、その間に家事を済ますといった子守り代わりの利用や子どもをなだめたりあやしたりするといった”スマホ育児”が日常に浸透しつつある(橋元・久保岡・大野, 2019)。そして家庭スマホ育児が浸透するにつれ、親などの保護者によるモバイルテクノロジー利用時に、保護者が画面を閲覧する時間が親子間のコミュニケーションや交流を阻害する、Parent Screen Distraction (以下、PSD) の発生とそのネガティブな影響が懸念されている(Blackman, 2015 など)。

そこで、本研究では母親のスマホ育児と PSD に焦点を当て、(1)母親によるスマホ育児の実態、(2)PSD の実態と母親の PSD への態度・意識を明らかにすることを目的に、3歳から10歳の第一子をもつ母親にオンライン上でアンケート調査を実施した。

なお、本稿の調査は、本紀要に同時に掲載されている橋元・久保岡・大野「育児とスマートフォン」(橋元・久保岡・大野, 2020)と同一の調査に基づいている。本稿の調査方法、回答者の属性、質問票および単純集計結果単純集計値は前記の論文を参照願いたい。

## 1. 母親によるスマホ育児の実態

### 1.1 全体／子どもの性別／学齢別分析結果

Q18 では、母親によるスマホ育児について、日常の育児場面でのスマートフォン利用の有無について尋ねている。設問文および選択肢は、橋元・久保隅・大野（2019）を採用し、「怒ったり不機嫌なお子さんをなだめたり、落ち着かせたりするため」「家で静かに過ごさせるため」、「食事中のとき」、「電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき」、「自分が家事をするときの子守代わり」、「寝かしつけのとき」の6場面に加え、新規に「勉強やテストなどのごほうびとして」を追加した。設問文は「あなたは育児の際、次のような時に、スマートフォンやタブレットをお子さんに見せたり使わせたりすることが、どの程度ありますか。あてはまるものをお選びください。」で、「かなりある」「ややある」「あまりない」「まったくない」の4件法で尋ねた。回答はスマートフォンもしくはタブレット端末利用者（N=557）である。表 1.1 に「かなりある」「ややある」と回答した割合と子どもの性別および学齢別のクロス集計の $\chi^2$ 検定結果を示す。

表 1.1 全体／子どもの性別および学齢別  
育児におけるスマートフォン・タブレット端末の利用目的(単位：%)

	怒ったり不機嫌なお子さんをなだめたり、落ち着かせたりするため	家で静かに過ごさせるため	食事中のとき	電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき	自分が家事をするときの子守代わり	寝かしつけのとき	勉強やテストなどのごほうびとして	N
全体	40.0	60.0	9.2	39.7	47.6	8.3	30.2	557
性別 男	42.7	62.0	9.5	43.8	48.5	8.4	32.8	274
女	37.5	58.0	8.8	35.7	46.6	8.1	27.6	283
$\chi^2$ 値	1.60	0.97	0.07	3.82	0.20	0.01	1.85	
検定結果	n.s.	n.s.	n.s.	†	n.s.	n.s.	n.s.	
学齢 未就学	46.7	61.1	12.2	45.0	53.7	9.2	16.2	229
就学	35.4	59.1	7.0	36.0	43.3	7.6	39.9	328
$\chi^2$ 値	7.25	0.22	4.41	4.57	5.87	0.43	36.21	
検定結果	**	n.s.	*	*	*	n.s.	***	

※スマートフォン、タブレット機器非利用者を除く回答数。「かなりある」「ややある」と回答した割合と子どもの年齢のクロス集計の $\chi^2$ 検定結果。\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$ , †:  $p < .10$ , n. s. 有意差なし。

※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」、赤字は「有意に低い」ことを示す。

母親はどのような場面でスマホ育児をしているのだろうか。最も行われているスマホ育児は「家で静かに過ごさせるため（60%）」、次いで「自分が家事をするときの子守代わり（47.5%）」、「怒ったり不機嫌なお子さんをなだめたり、落ち着かせたりするため（40.0%）」、「電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき（39.7%）」であった。日常の様々な場面で子守り代わりに利用されているようすが伺える。

子どもの性別の観点からみると、「電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき」のみ、男児 43.8%、女児 35.7%と約 8 ポイント男児の該当率が高く、10%水準での緩やかな有意差がみられ、残差分析でも 5%水準で有意に男児の該当率が高かった。それ以外の場面では子どもの性別で有意差はみられなかった。

続いて学齢では、「家で静かに過ごさせるため」、「寝かしつけのとき」を除く 5 項目で未就学児および就学児との間に有意差があり、「怒ったり不機嫌なお子さんをなだめたり、落ち着かせたりするため」、「電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき」、「自分が家事をするときの子守代わり」の 4 項目で未就学児が就学児と比較しておよそ 10 ポイント程度該当率が高く、「食事中のとき」は約 5 ポイント該当率が高く、残差分析においていずれも有意に未就学児の該当率が高かった。逆に「勉強やテストなどのごほうびとして」は就学児が未就学児と比較して 23.7 ポイント該当率が高く、残差分析の結果でも有意に就学児の該当率が高かった。未就学児の「自分が家事をするときの子守代わり」でのスマートフォン利用は 53.7%と半数以上の未就学児の母親になされており、低年齢の子ども単独のスマートフォン利用の場数が少なからず存在するという現状が浮き彫りとなった。子どもの年齢が低いほど、子どもをあやしたり、子守り代わりなど、様々な場面でスマートフォンが用いられているようすが伺え、低年齢でのスマートフォン利用がこうしたスマホ育児からも促進されているといえよう。

## 1.2 母親の職業別／世帯年収別／学歴別分析結果

表 1.2 に母親の職業別、世帯年収別、学歴別にスマホ育児を分析した結果を示す。母親の職業別では、「食事中のとき」、「勉強やテストなどのごほうびとして」の 2 場面で有意差がみられ、「食事中のとき」はフルタイム 14.7%、パートタイム・アルバイト 5.2%、専業主婦 9.5%で、有意にフルタイムの回答比率が高く、パートタイム・アルバイトの回答比率が低かった。また、「勉強やテストなどのごほうびとして」では、フルタイム 36.2%、パートタイム・アルバイト 34.1%、専業主婦 25.2%であり、専業主婦で有意に回答比率が低かった。それ以外の 5 場面では有意差はなかった。

世帯年収別では、7 場面全てにおいて有意差はみられなかった。しかしながら、残差分析の結果、「電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき」のみ、600 万から 800 万円未満の層で有意に回答比率が低かった。

最後に学歴別では、「電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき」のみ有意差がみられ、高卒以下 32.3%、短大及び高専・専門学校卒 44.8%、大卒以上 41.9%であった。残差分析でも高卒以下において有意に回答比率が低く、高卒以下で公共の場でのスマホ利用に非積極的なようすが伺える。

2018年に実施した同様の調査（橋元・久保隅・大野，2019）では、学歴別において「食事中」を除く全ての項目で有意差がみられたが、本調査では学歴を含む母親の属性で差異があまりみられない結果となり、母親の属性に関わらず、広くスマホ育児が浸透しているようすが伺える。

表 1.2 母親の職業／学歴／世帯年収別  
育児におけるスマートフォン・タブレット端末の利用目的(単位：%)

		怒ったり不 機嫌なお子 さんをなだ めたり、落 ち着かせた りするため	家で静かに 過ごさせる ため	食事中のと き	電車やバスな どの公共交 通機関やレ スランなど の公共の場 にいるとき	自分が家事 をするとき の子守代わ り	寝かしつけ のとき	勉強やテ ストなど のほ うびとし て	N
職業	フルタイム	36.2	57.8	14.7	45.7	48.3	12.1	36.2	116
(N=551)	パートタイム・アルバイト	38.7	61.3	5.2	39.3	45.7	6.4	34.1	173
	専業主婦	41.6	59.5	9.5	37.8	48.1	7.3	25.2	262
$\chi^2$ 値		1.05	0.36	7.44	2.13	0.30	3.45	6.34	
検定結果		n.s.	n.s.	*	n.s.	n.s.	n.s.	*	
世帯年収	400万未満	36.3	59.3	7.1	41.6	44.2	8.0	25.7	113
(N=455)	400万以上-600万未満	42.2	66.2	11.7	39.6	53.9	7.8	33.1	154
	600万以上-800万未満	35.1	55.3	8.5	30.9	48.9	9.6	34.0	94
	800万以上	43.6	57.4	9.6	46.8	42.6	7.4	31.9	94
$\chi^2$ 値		2.39	3.61	1.74	5.22	3.93	0.35	2.25	
検定結果		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	
学歴	高卒以下	42.5	61.1	9.6	32.3	50.9	9.6	32.9	167
(N=548)	短大および高専・専門学校卒	41.5	63.9	7.7	44.8	50.3	8.2	30.6	183
	大卒以上	36.4	56.6	10.6	41.9	43.4	7.1	27.3	198
$\chi^2$ 値		1.71	2.21	1.01	6.16	2.59	0.76	1.41	
検定結果		n.s.	n.s.	n.s.	*	n.s.	n.s.	n.s.	

※スマートフォン、タブレット機器非利用者および学歴別、世帯年収別では「わからない/答えなくない」の回答を除く回答数。職業別は学生および無職の回答を除く回答数。「かなりある」「ややある」と回答した割合と子どもの年齢のクロス集計の $\chi^2$ 検定結果。\*:  $p < .05$ , n. s. 有意差なし。

※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」、赤字は「有意に低い」ことを示す。

## 2 情報機器画面閲覧による干渉・妨害 (Parent Screen Distraction: PSD)

### 2.1 情報機器別 PSD 実態

Q19 では、機器別に PSD の頻度について尋ねている。対象の機器はスマートフォン、タブレット端末 (iPad など)、パソコン、テレビの 4 種である。設問文は「あなたはふだん、あなたのお子さんとの会話や活動中に、次の情報機器に気がそれてしまうことがどの程度ありますか。あてはまるものをお選びください。」であり、「1 日に 10 回以上」、「1 日に数回程度」、「1 日に 1 回程度」、「週に数回程度」、「週に 1 回以下」と回答した割合と子どもの性別、学齢別に比較した結果を表 2.1 に示す。

4 種の情報機器のうち、スマートフォン 77.3%、テレビ 70.2%、パソコン 17.7%、タブレット端末 16.0% の順に少なくとも週 1 回以下の PSD が発生している結果となり、スマートフォンおよびテレビは日常で母親の気をそらす二大機器となっている。これは昨年度の調査結果とも一致する。特にスマートフォン、テレビにおいては、図 2.1 に示すように、スマートフォンで 37%、テレビで 29.9% の母親が一日に数回以上の頻度で PSD が発生していると回答しており、かなりの頻度で PSD が発生しているようすが伺える。

子どもの性別では 4 種の情報機器全てにおいて男女間に有意差はなかった。学齢別ではパソコン、テレビにおいて有意差があり、パソコンでは就学児 (19.9%) において有意に回答比率が高く、未就学児 (14.6%) で低かった。テレビにおいては、未就学児 73.8%、就学児 67.7% で、有意に未就学児で回答比率が高く、就学児で低かった。子どもの学齢が上がるほど、家庭で子どもと一緒にの場面でのパソコンの利用が増加し、逆に子どもの学齢が低いほど、子どもと一緒にの場面でのテレビが増えるのかもしれない。

表 2.1 全体／子どもの性別／学齢と情報機器別 PSD の発生有無 (単位：%)

	スマートフォン	タブレット端末	パソコン	テレビ	N
全体	77.3	16.0	17.7	70.2	1240
性別 男	77.2	15.5	17.4	69.3	626
女	77.4	16.4	17.9	71.2	614
$\chi^2$ 値	0.01	0.21	0.05	0.50	
検定結果	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	
学齢 未就学	79.5	14.4	14.6	73.8	526
就学	75.6	17.1	19.9	67.6	714
$\chi^2$ 値	2.54	1.57	5.74	5.42	
検定結果	n.s.	n.s.	*	*	

※ 「1 日に 10 回以上」、「1 日に数回程度」、「1 日に 1 回程度」、「週に数回程度」、「週に 1 回以下」と回答した割合と子どもの性別、学齢別のクロス集計の  $\chi^2$  検定結果。\*:  $p < .05$ , n.s. 有意差なし。

※ 残差分析の結果 5% 水準 (両側検定) で数値が太字のものは「有意に高い」、赤字は「有意に低い」ことを示す。

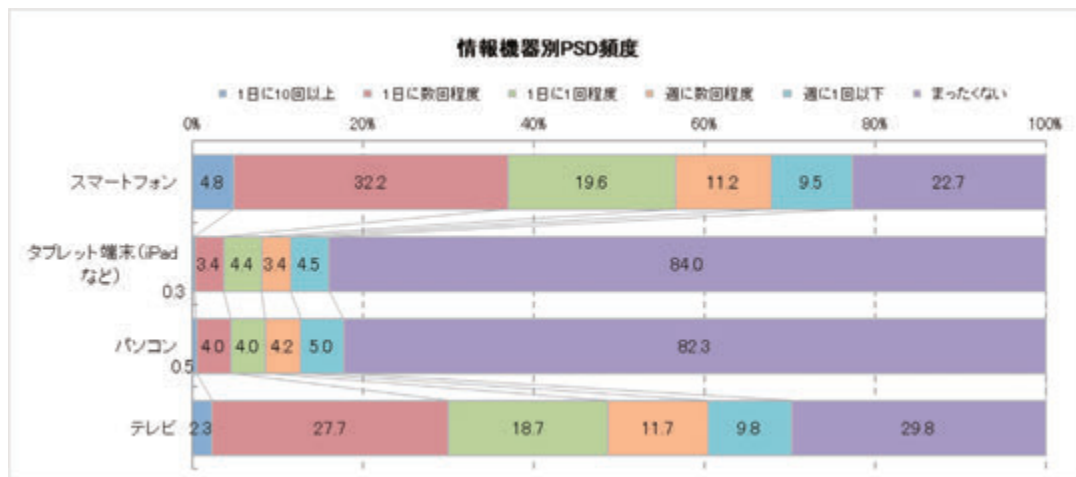


図 2.1 情報機器別 PSD 発生頻度

続いて表 2.2 に母親の属性別に情報機器 PSD 発生の回答割合を比較した結果を示す。職業別にみると、二大 PSD 機器であるスマートフォンおよびテレビは職業間で有意差はなかった。しかしながら、タブレット端末とパソコンにおいて職業間に有意差がみられ、フルタイムがタブレット端末による PSD があると回答した比率が 22.2%、同パソコン 24.1%と残差分析でも有意に高く、専業主婦のタブレット端末による PSD の該当率が 13.9%と有意に低い結果となった。フルタイムの母親ほど、タブレット端末、パソコンによる PSD 発生を認知しているといえよう。専業主婦の母親においては他の職業と有意差はないものの、スマートフォンによる PSD の該当率が 79.4%と多層と比較してやや高く、タブレット端末においては PSD の該当率が低いことが特徴的である。職業間で情報機器利用に差があることに起因する可能性がある。

表 2.2 母親の職業／学歴／世帯年収と情報機器別 PSD の発生有無(単位：%)

		スマート フォン	タブレット 端末 (iPad など)	パソコン	テレビ	N
職業 (N=1220)	フルタイム	74.3	22.2	24.1	72.0	261
	パートタイム・アルバイト	75.9	15.4	16.2	73.0	382
	専業主婦	79.4	13.9	16.1	67.6	577
$\chi^2$ 値		3.13	9.47	8.89	3.77	
検定結果		n.s.	**	*	n.s.	
世帯年収 (N=993)	400万未満	70.2	13.2	9.1	69.4	242
	400万以上-600万未満	84.0	13.4	19.9	76.3	337
	600万以上-800万未満	78.9	19.7	25.0	72.4	228
	800万以上	79.0	22.6	22.0	64.0	186
$\chi^2$ 値		15.84	11.03	22.20	9.49	
検定結果		**	*	***	*	
学歴 (N=1221)	高卒以下	72.3	15.2	12.5	68.8	336
	短大および高専・専門学校卒	81.8	13.9	14.8	71.1	440
	大卒以上	76.9	18.7	24.5	70.8	445
$\chi^2$ 値		9.94	4.00	22.94	0.58	
検定結果		**	n.s.	***	n.s.	

※ 「1日に10回以上」、「1日に数回程度」、「1日に1回程度」、「週に数回程度」、「週に1回以下」と回答した割合と母親の職業別、世帯年種別、学歴別のクロス集計の $\chi^2$ 検定結果。世帯年収及び学歴のN数は「わからない/答ええない」の回答を除く回答数。職業別のN数は学生および無職の回答を除く回答数。\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$ , n.s. 有意差なし。

※残差分析の結果5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」、赤字は「有意に低い」ことを示す。

次に世帯年収別にみると、全ての情報機器で世帯年収グループ間に有意差があった。スマートフォンによるPSDでは、世帯収入400万円未満の層で70.2%と残差分析でも有意に該当率が低く、世帯年収400万円以上から600万円未満の層で84.0%と有意に該当率が高かった。テレビによるPSDでは世帯年収400万円以上から600万円未満の層で76.3%と有意に該当率が高く、世帯年収800万円以上の層で64.0%と有意に低い結果となった。世帯年収400万円以上から600万円未満の層はスマートフォンおよびテレビのPSD二大機器において、他の世帯年収層と比較して最もPSD該当率が高いことが特徴的である。タブレット端末のPSDにおいては、残差分析の結果、世帯年収800万円以上の層で有意に該当率が高く、逆にテレビにおいて、世帯年収800万円以上の層で有意に該当率が低かった。世帯年収800万円以上の層はタブレット端末の利用に積極的であり、また、テレビ視聴に対し



ては非積極的であり、その結果として PSD が発生していることが考えられる。パソコンによる PSD では、世帯年収 400 万円未満の層で 9.1%と残差分析でも有意に該当率が低く、世帯年収 600 万円から 800 万円未満の層で 25.0%と有意に該当率が高かった。

最後に学歴別に 4 つの情報機器による PSD を比較した結果をみると、スマートフォンおよびパソコンによる PSD において学歴グループ間に有意差があった。スマートフォンによる PSD では、高卒以下の層で 72.3%と残差分析の結果、有意に該当率が高かった。逆に短大および高専・専門学校卒の層で 81.8%と有意に該当率が低かった。パソコンでは高卒以下の層（12.5%）と短大及び高専・専門学校卒の層（14.8%）で残差分析の結果、該当率が有意に低く、大卒以上の層（24.5%）で有意に該当率が高かった。学歴別ではタブレット端末を除き、高卒以下の層で PSD 発生が低い傾向がみられる。タブレット端末およびテレビによる PSD は学歴グループ間に有意差はなかった。

## 2.2 日常生活場面での母親の PSD 状況認識

では、具体的にどのような PSD 状況が発生しているのだろうか。スマートフォンおよびテレビによる PSD について頻度を尋ねたものが Q20 である。本設問は橋元・久保隅・大野 (2019) と同様のものを使用した。「子どもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう」、「子どもとの顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう」を含む、6 つの PSD 状況について、「1 日に 10 回以上」、「1 日に数回程度」、「1 日に 1 回程度」、「週に数回程度」および「週に 1 回以下」と回答した割合と子どもの属性別のクロス集計の  $\chi^2$  検定結果を表 2.3 に示す。

最も回答割合が高かったのは「子どもと話しているときに、スマートフォンが鳴ると、取り出して確認してしまう（75.0%）」、次いで「子どもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、子どもへの注意力が散漫になってしまっている（68.6%）」、「子どもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう（64.6%）」であり、「スマートフォンなどを操作していて、子どもから目を離れた隙に、子どもが怪我をしそうになったことがある（23.0%）」を除いた全ての 5 項目で 6 割弱から 7 割強の母親が該当すると回答しており、PSD による注意散漫状況がかなりの程度経験されているといえよう。この数字は子どもと一緒にいる生活場面で PSD が日常的に発生しており、食事や会話時間といった子どもとのコミュニケーションや交流を妨げている可能性が示唆される。「スマートフォンなどを操作していて、子どもから目を離れた隙に、子どもが怪我をしそうになったことがある」についても、23.0%の母親が日常で経験しており、PSD により子どもに直接的な危害状況をもたらす可能性が少なからずあったことは注意喚起や状況の改善が必要だろう。

表 2.3 全体／子どもの性別／学齢別

日常生活場面での母親の PSD 状況認識 (単位：%)

	子どもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう	子どもとの顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう	子どもと話しているときに、スマートフォンが鳴ると、取り出して確認してしまう	子どもと話しているときに、テレビの方が気になってしまう	子どもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、子どもへの注意力が散漫になってしまっている	スマートフォンなどを操作していて、子どもから目を離した隙に、子どもが怪我をしそうになったことがある	N
全体	64.6	59.8	75.0	62.4	68.6	23.0	1240
性別 男	62.5	57.5	73.2	60.9	66.1	23.0	626
女	66.8	62.2	76.9	64.0	71.2	23.0	614
$\chi^2$ 値	2.52	2.86	2.28	1.31	3.66	0.00	
検定結果	n.s.	†	n.s.	n.s.	†	n.s.	
学齢 未就学	66.0	61.2	75.7	64.6	<b>72.2</b>	<b>26.6</b>	526
就学	63.6	58.8	74.5	60.8	<b>66.0</b>	<b>20.3</b>	714
$\chi^2$ 値	0.75	0.72	0.22	1.92	5.54	6.81	
検定結果	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	*	**	

※「1日に10回以上」、「1日に数回程度」、「1日に1回程度」、「週に数回程度」、「週に1回以下」と回答した割合と子どもの年齢のクロス集計の $\chi^2$ 検定結果。\*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$ , †:  $p < .10$ , n.s. 有意差なし。

※残差分析の結果5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」、赤字は「有意に低い」ことを示す。

子どもの性別による比較では、「子どもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、子どもへの注意力が散漫になってしまっている」のみ、男児66.1%、女児71.2%の該当率であり、有意水準10%での差があったものの、概ね男女間で差はないといえよう。

子どもの学齢別では、「子どもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、子どもへの注意力が散漫になってしまっている」および「スマートフォンなどを操作していて、子どもから目を離した隙に、子どもが怪我をしそうになったことがある」の2項目でPSDの発生に有意差がみられ、いずれも未就学児ほど該当率が有意に高い。残差分析の結果でも、2項目ともに有意に未就学児の該当率が高く、就学時の該当率が有意に低かった。このことから、PSDによる注意散漫状況や注意散漫による子どもへの危害発生の可能性は未就学児ほど発生しやすいといえる。

つづいて、母親の職業、世帯年収および学歴別に日常生活場面での母親のPSD状況認識について、「1日に10回以上」、「1日に数回程度」、「1日に1回程度」、「週に数回程度」および「週に1回以下」と回答した割合を比較した結果を表2.4に示す。

表 2.4 母親の職業別／世帯年収別／学歴別

日常生活場面での母親の PSD 状況認識 (単位：%)

		子どもと一緒に 食事をしている ときに、スマー トフォンを取り 出して確認して しまう	子どもとの顔を 合わせて話して いるときに、 メールやメッ セージを送って しまう	子どもと話して いるときに、ス マートフォンが 鳴ると、取り出 して確認してし まう	子どもと話して いるときに、テ レビの方が気 になってしまう	子どもを遊ばせ ている時に、ス マートフォンな どを操作して、 子どもへの注意 力が散漫になっ てしまっている	スマートフォン などを操作して いて、子どもか ら目を離れた隙 に、子どもが怪 我をしそうにな ったことがある	N
職業	フルタイム	68.6	63.2	77.8	60.2	69.0	26.4	261
(N=1220)	パートタイム・アルバイト	61.0	57.9	73.0	62.0	66.2	21.7	382
	専業主婦	65.3	60.1	75.0	62.9	69.7	22.2	577
$\chi^2$ 値		4.12	1.86	1.86	0.58	1.30		2.31
検定結果		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.		n.s.
世帯年収	400万未満	62.8	53.3	71.9	61.2	65.7	18.6	242
(N=993)	400万以上-600万未満	64.7	63.8	80.7	69.4	74.8	27.9	337
	600万以上-800万未満	69.3	63.2	79.8	63.6	70.6	18.0	228
	800万以上	68.8	60.2	74.2	57.0	69.9	26.3	186
$\chi^2$ 値		3.12	7.45	8.05	9.10	5.68		11.60
検定結果		n.s.	†	*	*	n.s.		**
学歴	高卒以下	61.3	55.7	73.8	62.2	67.3	22.9	336
(N=1221)	短大および高専・専門学校卒	64.5	62.3	77.3	64.8	70.7	18.9	440
	大卒以上	68.8	61.8	74.6	60.4	69.0	27.6	445
$\chi^2$ 値		4.82	4.16	1.44	1.78	1.05		9.59
検定結果		†	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.		**

※常にしている」「ときどきしている」と回答した割合と子どもの年齢、性別のクロス集計の $\chi^2$ 検定結果。世帯年収及び学歴のN数は「わからない/答えたくない」の回答を除く回答数。職業別のN数は学生および無職の回答を除く回答数。\*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$ , †:  $p < .10$ , n.s. 有意差なし。

※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

6つのPSD状況全てにおいて母親の職業グループ間で有意差はなかった。日常のPSD状況認識は母親の職業の影響はないといえよう。

学歴別では「子どもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう」で10%水準の、「スマートフォンなどを操作していて、子どもから目を離れた隙に、子どもが怪我をしそうになったことがある」で1%水準の有意差がみられた。2項目共に残差分析の結果、大卒以上のグループで有意に回答比率が高かった。食事時のPSDについては、育児場面での情報機器利用(Q18)について、大卒で食事時に子どもに情報機器を利用させるとの回答が他のグループと比較してやや多い結果となっていたが、食事時の情報機器利用頻度が母子ともに他のグループと比較して多いことが影響しているのかもしれない。

最後に母親の世帯年収別では、「子どもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう」に若干の、「子どもとの顔を合わせて話しているときに、メ

ールやメッセージを送ってしまう」、「子どもと話しているときに、スマートフォンが鳴ると、取り出して確認してしまう」、「子どもと話しているときに、テレビの方が気になってしまう」、「スマートフォンなどを操作していて、子どもから目を離れた隙に、子どもが怪我をしそうになったことがある」の項目で有意差があった。世帯年収 400 万円未満の層では、残差分析でも、「子どもとの顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう」、「子どもと話しているときに、スマートフォンが鳴ると、取り出して確認してしまう」、「スマートフォンなどを操作していて、子どもから目を離れた隙に、子どもが怪我をしそうになったことがある」の 3 項目で有意に回答比率が低く、日常の PSD 発生状況の認識が他の年収グループと比較して低いことが示された。世帯年収 400 万円以上から 600 万円未満の層では逆に、「子どもと話しているときに、テレビの方が気になってしまう」および「子どもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、子どもへの注意力が散漫になってしまっている」、「スマートフォンなどを操作していて、子どもから目を離れた隙に、子どもが怪我をしそうになったことがある」の 3 項目において、残差分析の結果、有意に回答比率が高かった。概して、**世帯年収 400 万円未満のグループで PSD 発生の認知が少なく、世帯年収 400 万円以上 600 万円未満のグループで PSD 発生の認知が多くな**されているといえよう。

### 2.3 育児と情報機器およびソーシャルメディア利用への態度・考え

最後に育児における情報機器およびソーシャルメディア利用への態度や考えについて検討する。育児場面や子どもと一緒にいる場面での情報機器とソーシャルメディア利用について、「子どもの前で LINE などの SNS を使うことにはためらいがある」、「手が空くと、子どもの前でもつい自分のスマートフォンを見たくなくなってしまふ」、「子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することで、子どもへの注意や関心がそれてしまふ」、「子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することに罪悪感を感じる」、「子どもの目の前で、自分や配偶者がスマートフォンなどの情報機器を利用することは避けたい」、「公園や電車などの公共の場で子どもと一緒にいるときに、情報機器を使っていたり、子どもに使わせたりすると、周りの人からよく思われぬ気がする」、「子どもにスマートフォンを使わせすぎている気がする」、「育児ストレスから逃れるために、ついスマートフォンを使ってしまう」、「育児ストレスから逃れるために、子どもにスマートフォンを使わせてしまふ」、「スマートフォンは子どもにとって最高のおもちゃである」、「子どもは情報機器以外のおもちゃやもので遊ぶ方がよいと思う」の 11 項目の設定問を設定し、「あてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の 4 件法で回答を求めた。表 2.5 に全体および子どもの性別、学齢別に回答結果の比較を示す。

表 2.5 全体／子どもの性別／学齢別

育児と情報機器およびソーシャルメディア利用への態度・考え（単位：％）

	子ども性別										子ども学齢			
	全体		男児		女児		χ <sup>2</sup> 値	検定結果	未就学		就学		χ <sup>2</sup> 値	検定結果
	N													
子どもの前でLINEなどのSNSを使うことにはためらいがある	37.4	36.7	38.1	0.25	n.s.	38.8	36.4	0.73	n.s.					
手が空くと、子どもの前でもつい自分のスマートフォンを見たくなくなってしまう	68.6	66.9	70.4	1.69	n.s.	69.4	68.1	0.25	n.s.					
子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することで、子どもへの注意や関心がそれてしまう	51.9	51.8	52.0	0.01	n.s.	<b>55.3</b>	<b>49.3</b>	4.40	*					
子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することに罪悪感を感じる	49.4	48.6	50.3	0.39	n.s.	<b>55.1</b>	<b>45.2</b>	11.86	***					
子どもの目の前で、自分や配偶者がスマートフォンなどの情報機器を利用することは避けたい	52.5	51.8	53.3	0.28	n.s.	<b>60.1</b>	<b>46.9</b>	21.03	***					
公園や電車などの公共の場で子どもと一緒にいるときに、情報機器を使っていたり、子どもに使わせたりすると、周りの人からよく思われない気がする	66.5	67.3	65.6	0.36	n.s.	<b>71.9</b>	<b>62.5</b>	12.00	***					
子どもにスマートフォンを使わせすぎている気がする	25.6	26.2	25.1	0.20	n.s.	24.9	26.2	0.26	n.s.					
育児ストレスから逃れるために、ついスマートフォンを使ってしまう	44.8	45.2	44.3	0.10	n.s.	<b>49.2</b>	<b>41.5</b>	7.42	**					
育児ストレスから逃れるために、子どもにスマートフォンを使わせてしまう	26.9	25.7	28.0	0.83	n.s.	<b>29.8</b>	<b>24.6</b>	4.17	*					
スマートフォンは子どもにとって最高のおもちゃである	30.4	31.2	29.6	0.33	n.s.	30.4	30.4	0.00	n.s.					
子どもは情報機器以外のおもちゃやもので遊ぶ方がよいと思う	77.1	78.3	75.9	0.99	n.s.	79.7	75.2	3.39	†					

※「あてはまる」、「ややあてはまる」と回答した割合と子どもの年齢、性別のクロス集計のχ<sup>2</sup>検定結果。\*\*\*: p<.001, \*\*: p<.01, \*: p<.05, †: p<.10, n.s. 有意差なし。

※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

全体で最も回答比率が高かったものは「子どもは情報機器以外のおもちゃやもので遊ぶ方がよいと思う(77.1%)」で、約8割弱の母親が情報機器より、他のおもちゃ等で子どもが遊ぶことが望ましいとの考えを持っていた。逆に、「スマートフォンは子どもにとって最高のおもちゃである(30.4%)」は3割程度の母親の支持にとどまったものの、スマートフォンが子どもにとって魅力的なツールであるという認識が一定程度持たれていることが垣間見られる。

子どもの前での自身の情報機器やソーシャルメディアの利用については、「手が空くと、子どもの前でもつい自分のスマートフォンを見たくなくなってしまう(68.5%)」、「子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することで、子どもへの注意や関心がそれてしまう(51.9%)」、「子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することに罪悪感を感じる(49.4%)」、「子どもの目の前で、自分や配偶者がスマートフォンなどの情報機器を利用することは避けたい(52.5%)」、「公園や電車などの公共の場で子どもと一緒に

いるときに、情報機器を使っていたり、子どもに使わせたりすると、周りの人からよく思われぬ気がする (66.5%)」で約 5 割から 7 割弱の母親が該当し、子どもの前での情報機器やソーシャルメディア利用によるネガティブな効用や意識を少なからず持っているといえよう。「子どもの前で LINE などの SNS を使うことにはためらいがある (37.4%)」はスマートフォン利用と比較すると、子どもの前でのソーシャルメディア利用にはネガティブな意識は少ないようである。

育児ストレスとスマートフォン利用との関係に関する設問では、「育児ストレスから逃れるために、ついスマートフォンを使ってしまう (44.8%)」で、育児ストレスによるスマートフォン利用が半数弱の母親に肯定されていた。育児ストレスによる子どもへのスマートフォン利用については、「育児ストレスから逃れるために、子どもにスマートフォンを使わせてしまう (26.9%)」で、少なからず、育児ストレスを逃れるために母親自身、もしくは子どもにスマートフォンを利用させてしまうことが生じている現状が明らかとなった。

子どもの性別 (表 2.5) では、全ての項目において有意差はなかった。しかしながら、子どもの学齢別の比較 (表 2.5) では、「子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することで、子どもへの注意や関心がそれてしまう」、「子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することに罪悪感を感じる」、「子どもの目の前で、自分や配偶者がスマートフォンなどの情報機器を利用することは避けたい」、「公園や電車などの公共の場で子どもと一緒にいるときに、情報機器を使っていたり、子どもに使わせたりすると、周りの人からよく思われぬ気がする」、「育児ストレスから逃れるために、ついスマートフォンを使ってしまう」、「育児ストレスから逃れるために、子どもにスマートフォンを使わせてしまう」の 6 項目で有意差が認められ、残差分析の結果でも未就学児を持つ母親ほど回答比率が高く、就学児を持つ母親ほど回答比率が低かった。概して、就学児と比較して未就学児を持つ母親ほど、子どもの前での情報機器やソーシャルメディア利用に対するネガティブな認知や態度を持っているといえる。育児ストレスによる母親自身のスマートフォン利用や子どもへの利用も未就学児ほど多く、子どもの年齢が低いほど、育児ストレスによるスマートフォン利用が増える。その利用と共にスマートフォンやソーシャルメディア利用に対してより罪悪感を感じたり、周囲からの目を気にしたりしてしまうのかもしれない。

表 2.6 母親の職業別

育児と情報機器およびソーシャルメディア利用への態度・考え（単位：％）

N	母親職業 (N=1220)			χ <sup>2</sup> 値	検定結果
	パートタイム・アルバイト				
	フルタイム	パート	専業主婦		
	261	382	577		
子どもの前でLINEなどのSNSを使うことにはためらいがある	37.5	34.8	39.3	2.01	n.s.
手が空くと、子どもの前でもつい自分のスマートフォンを見たくてしまう	64.8	70.2	69.5	2.44	n.s.
子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することで、子どもへの注意や関心がそれてしまう	51.0	56.0	49.0	4.54	n.s.
子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することに罪悪感を感じる	50.6	48.2	50.1	0.47	n.s.
子どもの目の前で、自分や配偶者がスマートフォンなどの情報機器を利用することは避けたい	56.7	49.5	53.0	3.30	n.s.
公園や電車などの公共の場で子どもと一緒にいるときに、情報機器を使っていたり、子どもに使わせたりすると、周りの人からよく思われたい気がする	65.9	67.5	66.2	0.25	n.s.
子どもにスマートフォンを使わせすぎている気がする	30.3	24.6	24.1	3.88	n.s.
育児ストレスから逃れるために、ついスマートフォンを使ってしまう	40.6	45.3	45.9	2.16	n.s.
育児ストレスから逃れるために、子どもにスマートフォンを使わせてしまう	32.6	27.0	23.9	6.88	*
スマートフォンは子どもにとって最高のおもちゃである	32.6	31.2	28.8	1.41	n.s.
子どもは情報機器以外のおもちゃやもので遊ぶ方がよいと思う	71.6	76.2	80.2	7.81	*

※N数は学生および無職の回答を除く回答数。「あてはまる」、「ややあてはまる」と回答した割合と母親の職業別のクロス集計のχ<sup>2</sup>検定結果。\*: p < .05, n. s. 有意差なし。

※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」、赤字は「有意に低い」ことを示す。

続いて、母親の職業別に情報機器およびソーシャルメディア利用への態度や考えに関する回答を比較した結果を表 2.6 に示す。「育児ストレスから逃れるために、子どもにスマートフォンを使わせてしまう」、「子どもは情報機器以外のおもちゃやもので遊ぶ方がよいと思う」の 2 項目において職業グループ間に有意差があった。「育児ストレスから逃れるために、子どもにスマートフォンを使わせてしまう」では、残差分析でも有意にフルタイム（32.6％）の回答割合が高く、専業主婦（23.9％）の回答割合が有意に低かった。仕事をもち、家事や育児との両立で忙しいほど育児ストレスが生じ、その結果、子どもにスマートフォン利用をさせてしまうのかもしれない。類似の設問である「子どもにスマートフォンを使わせすぎている気がする」についても、フルタイムが最も回答割合が高かった。「子

どもは情報機器以外のおもちゃやもので遊ぶ方がよいと思う」については、逆に専業主婦（80.2%）の回答割合が有意に高く、フルタイム（71.6%）の回答割合が有意に低かった。子どものスマートフォン利用に対しては仕事を持つほど肯定的になるといえよう。

同様に表 2.7 に母親の学歴別に比較した結果を示す。子どもの前でのスマートフォンおよび SNS の利用に対するためらい、罪悪感、周囲の人の目を気にするといったネガティブな認知に関して、「子どもの前で LINE などの SNS を使うことにはためらいがある」、「子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することに罪悪感を感じる」、「子どもの目の前で、自分や配偶者がスマートフォンなどの情報機器を利用することは避けたい」、「公園や電車などの公共の場で子どもと一緒にいるときに、情報機器を使っていたり、子どもに使わせたりすると、周りの人からよく思われたい気がする」の項目で有意差があった。いずれも、**高卒以下のグループで回答割合が低く、学歴が上がるほど回答割合が高くなる**。残差分析の結果でも、「子どもの前で LINE などの SNS を使うことにはためらいがある」、「子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することに罪悪感を感じる」、「子どもの目の前で、自分や配偶者がスマートフォンなどの情報機器を利用することは避けたい」の 3 項目で、高卒以下のグループの回答割合が有意に低く、大卒以上で有意に高かった。**子どもの前でのスマートフォンおよび SNS の利用に対するためらい、罪悪感、周囲の人の目を気にするといったネガティブな認知は、総じて学歴が上がるほど高くなる**といえよう。

子どもにとってのスマートフォンの存在についての項目である「スマートフォンは子どもにとって最高のおもちゃである」で有意差があり、「子どもは情報機器以外のおもちゃやもので遊ぶ方がよいと思う」でもやや有意な傾向があった。いずれも、残差分析の結果、高卒において、「スマートフォンは子どもにとって最高のおもちゃである」で有意に回答割合が高く、「子どもは情報機器以外のおもちゃやもので遊ぶ方がよいと思う」で有意に回答割合が低かった。**高卒以下において、スマートフォンを玩具として肯定的に捉える母親が多い傾向がある**。

育児ストレスの関連項目では、「育児ストレスから逃れるために、子どもにスマートフォンを使わせてしまう」のみやや有意な傾向がみられ、この項目でも残差分析の結果、高卒以下の母親で有意に回答割合が高かった。学歴別では、総じて学歴が低いほど、子どもの前でのスマートフォン利用や SNS に対して寛容な態度や認知を持っているといえる。



表 2.7 母親の学歴別

育児と情報機器およびソーシャルメディア利用への態度・考え（単位：％）

N	母親学歴 (n=1221)			χ <sup>2</sup> 値	検定結果
	短大および				
	高卒以下	高専・専門 学校卒	大卒以上		
	336	440	445		
子どもの前でLINEなどのSNSを使うことにはためらいがある	31.5	33.2	45.8	21.82	***
手が空くと、子どもの前でもつい自分のスマートフォンを見たくなくなってしまう	66.1	71.8	67.2	3.52	n.s.
子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することで、子どもへの注意や関心がそれてしまう	48.5	53.4	53.5	2.38	n.s.
子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することに罪悪感を感じる	44.0	47.7	54.8	9.59	**
子どもの目の前で、自分や配偶者がスマートフォンなどの情報機器を利用することは避けたい	44.6	51.1	59.6	17.51	***
公園や電車などの公共の場で子どもと一緒にいるときに、情報機器を使っていたり、子どもに使わせたりすると、周りの人からよく思われぬ気がする	63.7	64.5	71.2	6.42	*
子どもにスマートフォンを使わせすぎている気がする	28.3	26.1	23.4	2.47	n.s.
育児ストレスから逃れるために、ついスマートフォンを使ってしまう	46.4	46.8	42.0	2.46	n.s.
育児ストレスから逃れるために、子どもにスマートフォンを使わせてしまう	31.8	26.6	24.0	5.99	†
スマートフォンは子どもにとって最高のおもちゃである	37.5	28.9	27.4	10.25	**
子どもは情報機器以外のおもちゃやもので遊ぶ方がよいと思う	73.2	79.8	77.8	4.77	†

※N 数は学歴において「わからない/答えなくない」の回答を除く回答数。「あてはまる」、「ややあてはまる」と回答した割合と母親の学歴別のクロス集計のχ<sup>2</sup>検定結果。\*\*\*: p< .001, \*\*: p< .01, \*: p< .05, †: p< .10, n.s. 有意差なし。

※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」、赤字は「有意に低い」ことを示す。

最後に世帯年収別に比較した結果を表 2.8 に示す。「公園や電車などの公共の場で子どもと一緒にいるときに、情報機器を使っていたり、子どもに使わせたりすると、周りの人からよく思われぬ気がする」、「育児ストレスから逃れるために、ついスマートフォンを使ってしまう」の2項目において職業間で有意差があり、「子どもにスマートフォンを使わせすぎている気がする」において 10%水準の有意傾向がみられた。「公園や電車などの公共の場で子どもと一緒にいるときに、情報機器を使っていたり、子どもに使わせたりすると、周りの人からよく思われぬ気がする」では、残差分析の結果、世帯年収 400 万円未満のグループで有意に回答割合が低く、400 万円以上 600 万円未満のグループで有意に回

答割合が高かった。「子どもにスマートフォンを使わせすぎている気がする」では、残差分析の結果、世帯年収 400 万以上 600 万円未満のグループで有意に回答割合が高く、600 万円以上 800 万円未満のグループで有意に回答割合が低かった。「育児ストレスから逃れるために、ついスマートフォンを使ってしまう」では残差分析の結果、世帯年収 800 万円以上のグループで有意に回答割合が低かった。同様に、「子どもは情報機器以外のおもちゃやもので遊ぶ方がよいと思う」の項目においては、残差分析の結果、世帯年収 800 万円以上のグループで有意に回答割合が低く、高世帯年収層でスマートフォン利用との距離を置く様子が感じられる。

表 2.8 母親の世帯年収別

育児と情報機器およびソーシャルメディア利用への態度・考え（単位：％）

	母親世帯年収 (N=993)					検定 χ <sup>2</sup> 値	結果
	400万以 満		600万以 上-800 万未満		800万以 上		
	400万未 満	上-600 万未満	上-800 万未満	800万以 上			
N	242	337	228	186			
子どもの前でLINEなどのSNSを使うことにはためらいがある	36.0	36.8	36.8	41.4	1.57	n.s.	
手が空くと、子どもの前でもつい自分のスマートフォンを見たくなくなってしまう	66.5	72.1	72.4	64.0	5.61	n.s.	
子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することで、子どもへの注意や関心がそれてしまう	54.1	55.5	53.9	53.2	0.29	n.s.	
子どもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することに罪悪感を感じる	47.1	52.2	53.1	49.5	2.19	n.s.	
子どもの目の前で、自分や配偶者がスマートフォンなどの情報機器を利用することは避けたい	47.9	51.9	57.5	56.5	5.36	n.s.	
公園や電車などの公共の場で子どもと一緒にいるときに、情報機器を使っていたり、子どもに使わせたりすると、周りの人からよく思われぬ気がする	60.7	73.0	67.1	66.7	9.75	*	
子どもにスマートフォンを使わせすぎている気がする	24.8	30.9	20.6	26.3	7.72	†	
育児ストレスから逃れるために、ついスマートフォンを使ってしまう	42.6	50.4	50.0	39.2	8.66	*	
育児ストレスから逃れるために、子どもにスマートフォンを使わせてしまう	25.2	30.6	25.4	29.0	2.87	n.s.	
スマートフォンは子どもにとって最高のおもちゃである	28.5	34.1	30.7	31.2	2.15	n.s.	
子どもは情報機器以外のおもちゃやもので遊ぶ方がよいと思う	79.8	80.4	81.1	72.6	5.73	n.s.	

※N 数は世帯年収において「わからない/答えたくない」の回答を除く回答数。「あてはまる」、「ややあてはまる」と回答した割合と世帯年収別のクロス集計のχ<sup>2</sup>検定結果。\*: p< .05, †: p< .10, n.s. 有意差なし。

※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」、赤字は「有意に低い」ことを示す。

### 3. 考察および今後の課題

本研究では、3歳から10歳の第一子をもつ母親にオンライン上でアンケート調査を実施し、母親によるスマホ育児と、親などの保護者によるモバイルテクノロジー利用時に、保護者が画面を閲覧する時間が親子間のコミュニケーションや交流を阻害する、PSDの実態を明らかにした。

母親によるスマホ育児は、スマートフォンを用いて子どもをあやしたり、子守り代わりにして家事をこなすなど、様々な育児の場面で日常に浸透しており、子どもの年齢が低いほどなされていた。子どもが幼いころから、母親が子どもにスマートフォンを与えたり、自身も子どもの目の前で利用することで、子どもがスマートフォンへの親和性を高め、その結果、低年齢でのスマートフォン利用を促進する構図が示唆される。

母親によるPSDについては、スマートフォンで37%、テレビで29.9%の母親が一日に数回以上の頻度でPSDが発生しているという結果が呈示された。さらには、PSDによる注意散漫状況が発生していることも7割近くの母親が認識しており、日常においてこれらの情報機器がもたらすPSDが、母親と子どもの関係やコミュニケーションの間に何らかの影響を及ぼしていることは論を俟たない。

その一方で、母親自身も家事や育児に追われ、そのストレスから逃避したり、ストレスを解消したりするために母親自身がスマートフォンを利用する、子どもにスマートフォンを利用させるという現状も明らかとなり、加えて、母親はスマートフォンが家庭と仕事の効率化などにも寄与していることを認識しているようすも伺えた。スマートフォンを中心とした情報機器が母親の日々の育児や心身のサポートに貢献しているというポジティブな一面もあり、スマホ育児や子どもの前でのスマートフォン利用を一様に排除することは母親の育児負担やストレス軽減といった問題が解決されず、実際問題として現実的ではない。

今後、スマホ育児やPSDが子どもの発達、親子関係、コミュニケーションなどにおいてどのような影響があるのか、特にネガティブな影響やスマホ育児、PSDとの因果関係を明らかにするためのさらなる研究が待たれる。その上で、スマホ育児やPSDにおいてネガティブな影響を最小化するためのスマートフォンの利用の仕方、させ方の建設的な議論や検討が必要とされよう。

## 参考文献

Blackman, A. (2015). Screen time for parents and caregivers: Parental screen distraction and parenting perceptions and beliefs (Unpublished doctoral dissertation). New York, NY: Pace University.

橋元良明・久保隅綾・大野志郎 (2019) 「育児と ICT—乳幼児のスマホ依存、育児中のデジタル機器利用、育児ストレス」, 『東京大学大学院情報 学環 情報学研究 調査研究編』 No. 35, pp. 53-103.

橋元良明・久保隅綾・大野志郎(2020), 「育児とスマートフォン」, 『東京大学大学院情報 学環紀要 情報学研究・調査研究編』 No. 36, 印刷中.